



新体操

魂

第2号

激闘！北信越かがやき総体レポート

魅せた！「2012 インカレ名場面集」

ロングインタビュー

柴田翔平（青森大学→シルク・ドゥ・ソレイユ）

特別企画／鹿児島実業高校 2012 徹底研究





2012. 8. 10~11
於：サンドーム福井

<撮影：小林隆子/文：椎名桂子>

男子団体優勝：青森山田高校（青森県）



得点： 19.050

（構成： 9.600 実施： 9.450）

メンバー： 平野泰新・平岡貴士・前田夏樹
大岩達也・植野 洵・一山寛斗
榊原勝己・加藤悠斗



今年の青森山田は、長谷川達也率いるダンスユニット「DAZZLE」の名作「花と囀」の世界を表現することに挑戦した。その芝居がかった表現は、男子新体操の枠を踏み外すかどうか、ギリギリのところだったように思う。しかし、これはまぎれもなく「男子新体操」である、と証明したのが彼らのタンブリングの高さ、そして見事な同調性を見せた実施の良さだった。しっかりとした基礎があってこそその「表現」だったからこそ、この作品は名作となり、優勝を勝ち得たのだ。

女子団体優勝：名古屋女子大学高校（愛知県）



得点：24.300

(D：8.100 A：8.400

E：7.800)

メンバー：小木曾沙羅・堀 真那
佐々木実乃里・三浦佳純
上大田好花・吉岡 麗
中村咲穂・青木香実



まさに圧巻の演技だった。
どうしてもミスが多くなりがちなりボンを含む団体。今大会もミスに泣くチームが多かった中、交換の移動もほとんどなしという完成度の高い演技を見せた名女の優勝には、異論を挟む余地がない。

実施が正確なうえに、このチームのよさは、5人そろって身体能力が高いことと、「華やかさ」だ。明るく艶やかな表情は、コケティッシュな魅力にあふれ、観客を魅了した。名女らしい、じつにチャーミングなチームだった。

男子個人優勝：臼井優華（済美高校/岐阜県）



得点： 18.975
(Ri : 9.500 R : 9.475)



得点：
47.875
Ri : 23.825
C : 24.050



女子個人優勝：コン・ユン（金蘭会高校/大阪府）

男子団体準優勝：神埼清明高校（佐賀県）



得点：18.950

構成：9.550

実施：9.400

【メンバー】

荻原・三井所

富本・竹田

筒井・栗山

岡田・満武



得点：23.525

D：7.625

A：8.300

E：7.600

【メンバー】

小嶺・後藤

村口・小野

松本（愛）・竹内

羽田・徳永

女子団体準優勝：佐賀女子高校（佐賀県）

男子個人準優勝：小川晃平（井原高校/岡山県）



得点： 18.625
(Ri : 9.475 R : 9.150)



得点： 47.800
(Ri : 23.950 C : 23.850)

女子個人準優勝：成松由加理（別府鶴見丘高校/大分県）

男子団体3位：岡山県立井原高校（岡山県）



得点：18.900

構成：9.600

実施：9.300

【メンバー】

房野・久留間

佐能・原田

小川・西江

大舌・遠藤



得点：23.150

D：7.650

A：8.000

E：7.500

【メンバー】

熊沢・藪内

嶋岡・高谷

井上・西岡

吉村・代谷

女子団体3位：奈良文化高校（奈良県）

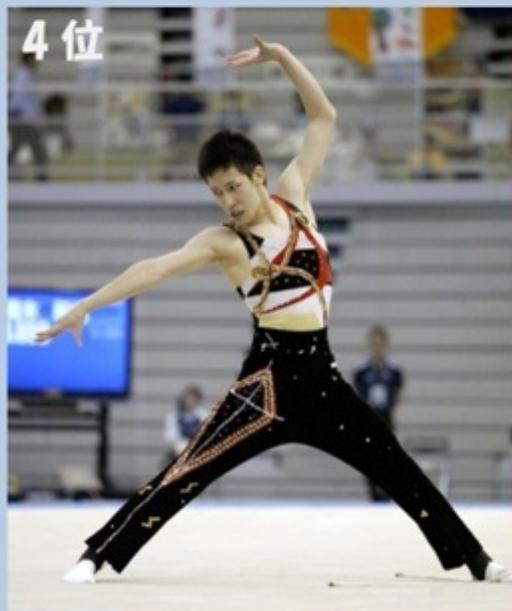


3位

【男子個人】

3位：川西伸也（坂出工業高校）18.525

4位：宮前 凌（恵庭南高校）18.425



4位

【女子個人】

3位：小木曾沙羅（名古屋女子大学高校）
47.425

4位：藤岡里沙乃（乙訓高校）46.825



3位



4位

5位



【男子個人】

5位：永井直也（青森山田高校）18.200

6位：福永将司（鹿児島実業高校）18.100

6位



【女子個人】

5位：松本優香（佐賀女子高校）46.475

6位：七尾真結（秋田北高校）46.375

5位



6位





4位



5位



6位

【男子団体競技】

4位：小林秀峰高校/宮崎県 18.700

朝留・砂田・石川・前田（春）
前田（豊）・皆越

5位：盛岡市立高校/岩手県 18.625

阿部・太田・鈴木・大西
大坪・小笠原

6位：恵庭南高校/北海道 18.525

佐藤・宮前・桑名・山本
村上・高橋

【女子団体競技】

4位：済美高校/岐阜県 22.900

高田・大西・小出・舩中
館林・服部

5位：二階堂高校/東京都 22.800

下野・高場・原・日当・小沢・角田

6位：金蘭会高校/大阪府 22.600

阪口・浜本・青木・橋本
和田・大野



5位



6位



4位

2012 きらめき総体を振り返って

男子▼山田小太郎（国士舘大学監督）／ 女子▼椎名桂子（フリーライター）

◇男子個人競技◇

上位と中堅以下の選手の差が大きかったという印象をもちました。リング、ロープという難しい手具だったせいもあり、ロープで差がついた印象でした。

やはり上位入賞した多くの選手たちは、ジュニアからしっかり基礎を取り組んできた



な、と感じました。これだけジュニアが盛んになってくると高校から始める子にはなかなか厳しい時代なので「きれいなつかっこい」という意識付けを高校生でもしっかり持ち、基礎の練習に時間をかける必要があると思います。タンブリングでも、「難度ができればつま先や形はどうでもいい」という意識では、これからは上にはいけないと思います。個人で連覇を達成した白井選手は、技術もさることながら気持ちが強いですと感じました。失敗することを考えずに演技できる自信がつくまで、練習しているのだろうか、と思わせる磐石の演技はさすがでした。二位の小川選手は、まさに逸材です。瞬発力、思い切りのよさが素晴らしい、まだ粗っぽいところもありますが、才能の片鱗が随所に見えた素晴らしい演技だったと思います。三位の川西

選手は、現代風でありながら、古風にも見える選手です。誰もが認めるだろうきれいで素直な動きがとても好印象でした。四位の宮前選手は、タンブリングや手具操作技術の高い選手ですが、去年まではミスが多かった。三年生になって実施力がついてきたらやはり強かったですね。五位の永井選手は、表現力は申し分ないのですが、演技に入り込むため、手具が疎かになる瞬間があるように思います。表現力と同じように実施力が上がってくれば、ぐっと強くなりそうです。六位の福永選手は表現力があると同時に、基本がしっかりとっていて、実施も正確でした。基礎能力の高さでは、次世代のホープとも言える楽しい選手です。まだ一年生なのが驚きです。

上位入賞者以外にも、光るものを感じる選手はいました。吉村翔太（科学技術）は、新

体操にまじめに取り組んでいることがにじみ出ている美しい徒手がとても爽やかな感動を与えてくれました。石川航大（埼玉栄）は、今回はミスが多くて残念でしたが、思い切りがよくてパワーのある新体操でありながら、美しさも兼ね備えたいい選手です。川島將嗣（会津工業）も技術力、表現力ともにあり、いい演技をしていました。内田諒（甲府工業）は、高校から新体操を始めた選手で、初心者のころから見ているので、今回のリングにはびっくりしました。短期間でこれだけ成長するというのは、本当にすばらしいと思います。

◇男子団体競技◇

今年のインターハイ団体の日は、会場全体がやる気にあふれているという感じがしました。どのチームも、「この試合に懸けている！」この試合のために頑張ってきた！ということのが伝わってきて、圧倒される思いでした。選手も指導者も特別な気持ちでこの日を迎えているのが感じられて、たとえどんな結果になっても、やってきたことは無駄じゃない

いと思える大会だったのではないかと思われました。インターハイの団体は毎年、盛り上がりますが、今年の盛り上がりは例年以上だったように感じました。

そんな中で優勝した青森山田の今年の作品は独創性が素晴らしかったです。徒手能力も高く、それが表現につながっていたし、実



施もきつちりまとめてきて、非常によかった。文句なしの優勝だと思えるいいチームでした。しかし、二位の神埼清明も、今年の演技にはとても感動しました。わずかにミスが出たが、優勝はできませんでしたが、十分に優勝を争える演技でした。神埼らしさは残しつつも、今まで以上に「きれいな体操」を見せていて、今年の演技は、私は大好きでした。「美しいこと。体操が深いこと。|| かつこい」という意識付けがしっかりなされていたように感じました。

三位の井原は、やはり構成がすばらしかった。徒手の繊細な部分までしっかり合わせているところなど、大学生でもなかなかあそこまではできない、と感じました。ミスがあったので今回の三位は残念な順位でしょうが、全日本ではこの作品をしつかりこなしてくるでしょうから、大学生にとっても脅威ですね。四位の小林秀峰は、今年は新しい表現に挑戦した印象でした。その新しい挑戦が実施力でも発揮できればもう少し上位に食い込めたのではないかと、という印象でした。更なる磨きをかけて「新しい小林らしさ」を追求

してもらいたいです。五位の盛岡市立の演技は、相変わらず斬新でした。これが最近の盛岡カラーという感じですが、個人的には少しダンスの比重が高い印象でした。しかし今の新体操の中で個性を出していくには高校生でもここまで追及していく必要があるのか、と改めて感じました。六位の恵庭南は、タンブリングの強さが印象的でした。しかし、せっかく滞空時間の長いタンブリングなのだから、空中姿勢やつま先などがもう少し美しくなり、精度が上がると点数も伸びると思いました。

七位の科学技術は、昨年、今年と二年続けてこのレベルにチームをまとめあげてきたところがすごいと思います。振付には奇抜なところもありますが、基本の体操がしっかりやれているのとても印象のいい演技でした。八位の埼玉栄は、致命的なミスがいくつかあり残念でした。サーカス的な面白さを見せてくれるこのチームの演技は、私は好きなのでぜひリベンジしてほしいです。更なる上位を目指すには、もう少し徒手に奥深さが出てくると思います。

◇女子個人競技◇

ユースチャンピオンシップに続いて、「超新星」コン・ユンに優勝をさらわれた、という印象の大会でした。折しもロンドン五輪でも新体操が行われており、ソン・ヨンジェ(韓国)が旋風を巻き起こしていました。日本人と体型も能力も大差ないヨンジェが五輪で活躍し、台湾からの留学生であるユンが、日本のインターハイで優勝。同じアジア人でありながら、日本人にはないものを韓国や台湾の選手達は持っている、と感じざるを得ません。今大会で改めて感じたユン選手のよさは、やはりそのダイナミックさです。肢体の美しさに恵まれていることもたしかですが、その体がなんともびやかに躍動するのです。ときには少々雑に見える瞬間もありますが、きちきちし過ぎていないからのびやかなのだとも言えそうです。日本の選手達にとっては強力なライバル出現ではあります。ユン選手に学べることも多いと思います。

二位の成松選手は、ジュニアのころから能力の高さでは目立っていました。今ひとつ

演技に味わいがいい印象でした。しかし、今大会でのクラブ、リボンの二種目は、曲もすばらしく、ドラマチックな演技でした。ジュニア時代とはうって変って、曲がいいとその曲に入り込んだ表情を見せて踊るようになり、驚くほどよくなっていました。三位の小木曾選手には、私はニックネームをつけました。「日本のソン・ヨンジェ」！ そう言いなくなるほど、演技中のアビール度が素晴らしいのです。彼女の輝く笑顔を見ると、審判だって笑顔になってしまいそうです。

四位の藤岡選手は、二種目とも落下のミスが出てしまい、表彰台を逃しました。とても美しく、表現力のある選手なのですが、肝心なところでのミスに泣かされることの多い



選手です。五位の松本選手は、これまで個人ではあまり名前があがっていなかった選手ですが、それでも五位に入ってくるところが佐賀女の底力でしょうか。今大会ではとくにクラブがよく、難度も操作もきっちり見せてメリハリのある演技がすばらしかったです。六位の七尾選手は、クラブでミスを連発しましたが、二種目のリボンでは、曲のメロディーにのって美しく、表現力のある演技を見せて追い上げました。ほとんどインターバルのない中でしっかり気持ちを切り替えられるその根性には感服しました。

七位以下の選手の中では、桑村美里（相模女子大学）のはじけるようなエネルギーな演技や、遠山ゆう（県立笠田）の挑戦的な演技が印象に残りました。また、今回はミスもあり、点数が伸びませんでした。加畑碧（桐朋女子）も、最近は非常にいきいきとしたよい表情で踊るようになってきて、これからは楽しみです。

◇女子団体競技◇

手具にリボンが入っている団体は、インタ

ーハイといえどもミスが多く、残念な演技になってしまふことが多いのですが、今大会も例にもれず、という印象でした。

そんな中で一番はじめに、自分達のやろうとしていることをちゃんと見せられたのが、三位に入った奈良文化でした。試技順十八番の奈良文化まで、ほとんどのチームに少なからずミスがあつたのです。バレエ音楽を使つたフィナーレのような華やかさと明るさがある演技で、見ていて楽しくなりました。

その直後に登場した佐賀女子も、演技序盤ではミスが続き不穏な始まりでしたが、中盤のフエッテ↓バックルジャンプあたりから盛り上がってきて、いい印象で演技を終えることができました。

大会も終盤の三十七番目に登場した名古屋女子の演技は、実施も笑顔もパーフェクトでした。スピードも華もあり、リボンでもこんなにできるんだ！ というところを見せてくれました。これ以上はもう出ないだろうと思わせた名女の演技でしたが、その直後の済美高校も勝るとも劣らない演技でした。リボンがあるからミスは仕方ないか、というそ



れまでの空気を払しょくする、スカッとするノーミス演技。女子はミスの多い試合でしたが、大会終盤になって、名女↓済美と試技順が続き、この時間帯だけ別世界のような完成度の高さでした。

五位の二階堂高校もほぼノーミスで一体感のある演技を見せ、六位の金蘭会は、今回はミスが出てしまいましたが、スリリングでとてもクールな演技でした。六位までのチームはジャパンでの活躍も楽しみです。



菅正樹（花園大学）、連覇達成！ ～男子個人総合～

全日本インカレを終えて、今大会の振り返りをするべく、私は中田吉光に話を聞くことにした。青森大学の監督という立場を離れて初めてのインカレは、中田の目にどう映ったのかにも興味があったからだ。

中田は開口一番こう言った。

「団体は、参加四チームという少なさが、さびしいね。」
たしかに、それは否めない。いくら素晴らしい演技の応酬があったところで、しよせん四チームの争いでは、「コップの中の嵐」と言われても仕方がない。



1位：菅 正樹（花園大学3年）

しかし、個人競技に目を向けると今年はかなりバランスよく各大学から上位に選手が残っていることに気がつく。ジャパン出場権を得た十八人の中にも、去年は一人も入らなかった福岡大学、同志社大学、中京大学から一人ずつの選手が入っている。青森大学、国士館大学、花園大学からはそ

れぞれ五人ずつがジャパンに残ったのも、妙にバランスがいい。つまり、それだけ群雄割拠の時代になってきているということだろう。

そんな戦国インカレを勝ち抜いたのは、菅正樹（花園大学）だった。終わってみれば個人総合優勝に、種目別決勝の四種目とも優勝を加え、「完全優勝」を成し遂げた。

中田も

「今大会の菅の強さはピカイチだった。」と舌を巻く。

「自分のリズムをしっかり守って、最後の種目別クラブまで八回の演技をすべてノーマスでまとめきったのは圧巻。何に対しても動じない安定感が素晴らしかった。」

個人総合最後の種目はロープだったが、このとき菅は、フロアに入る前に何回も頭を振っていた。まるで雑念を振り払うように。そして、見事なノーマス演技で、昨年が続いての優勝を勝ち取った。インカレでの最後の演技となった種目別のクラブを

演じ終えたときは、重い荷物をおろしたかのような彼の深い安堵が観客席からも見えるようだった。連覇がかかっているというだけでなく、彼にとつてひとかたならぬ思いのあった今年のインカレだったのだろう。

あとになって、菅正樹がどれほど本気で今回の優勝を狙っていたか、私は思い知るようになったが、その思いの深さの分、今大会での彼の演技には説得力があった。だから、誰もが納得するチャンピオンになり得たのだ。

二位の川西雅人（青森大学）も、個人総合では素晴らしい演技を見せた。とくにステイックでは九・五〇〇という川西の最高記録を更新する得点を得た。中田によると「インカレに向かう練習の内容がとても

2位：川西雅人（青森大学3年）



よかった。青大の中でも一、二を争うくらい練習していた。」という川西。

「今までは肝心なところで弱さが出ていたが、以前より欲が出てきたようだ。思いを込めて演じることがやっとできてきたので、彼のもつ総合力の高さが生きてきた。」

たしかに今大会の川西はひと皮むけたように私にも見えた。以前の品行方正な少年

3位：弓田速末（国士館大学3年）



から、少し危険な香りのする悪い男へと変身していた。もとよりタンブリングも強く、徒手も美しい選手だった。去年まで少し見せ方が淡泊な感があったが、ここにきてそれもがらりと変わった。大学最後の年にな

る来年に向けて、まだまだ化けてくれそうな予感大の選手だ。

「ほんとによくやっているとと思う。個性的で好き嫌いが分かれそうな演技をしてい

るのに、今回のようにノーマスでしつかりどの種目もまとめると、彼の雰囲気を出して伝えきる力が十分発揮され、評価にもつながったと思う。」

と、中田が手放して褒めたのは、三位に入った弓田速末（国士館大学）だ。たしかに今大会での弓田の演技には凄み、貫禄といったものが満ち溢れていた。種目別決勝にも四種目残り、合計八回の演技すべてがノーマス。それも、「弓田劇場」とでもいうべき濃

い演技だった。

一年前のインカレでは、ジャパンに残れるかどうかドキドキしながら見守っていた彼が、たった一年でどうしてこんなに成長したのか、不思議なくらいに、彼は確実に何段か上の領域の選手になっていた。そして、中田はこうも言った。「体の使い方などにはまだ惜しいところがあるが、そこがもっとよくなれば、よりよい選手になると期待できる。今の国士館は仲間にも恵まれ、刺激もあるから、まだまだ成長できる選手だと思う。」

青森大学の名将だった中田をもってして、

「仲間に恵まれている」

と言わしめた国士館大学。弓田に続いて四位に入ったのも、斉藤剛大（国士館大学）だった。斉藤に関しては、

「あれだけ手具操作がうまいとなく。」

と中田も脱帽の体だった。

「おまけに失敗を失敗に見せないだけの精神的な強さ、対応力がある。」

と、まだ二年生の斉藤を絶賛しながら、

4位：齊藤剛大（国士舘大学2年）



「動きにはまだ硬さは見られるが、あの多彩な手具操作があれば、点数は出るのも納得だ。」

と言った。

一年前のインカレのあと、中田に話を聞いたときに、彼はこう言っていた。

「新体操は徒手がピラミッドの底辺にある。美しく、正しい徒手が大前提にあって、その上に手具操作、そしてその上にタンブリング、ピラミッドの頂点には独創性と加算されるべきだ。」

そう。一年前の中田吉光は、「徒手第一主義」だった。しかし、今年少し違って感じた。

「徒手、手具操作、タンブリング、独創性。これらはすべて新体操の一要素である。」
と言う。もちろん、すべて兼ね備えていれば最強だが、ある部分に特化した選手は、そ

こで勝負するというやり方もありだ、と言っているように私には聞こえた。

「本来の自分は、やっぱり徒手が一番だと思っている。しかし、これだけ演技が多彩になり、高度化してくると、いろいろな戦い方があると認めざるを得ない気はしている。」

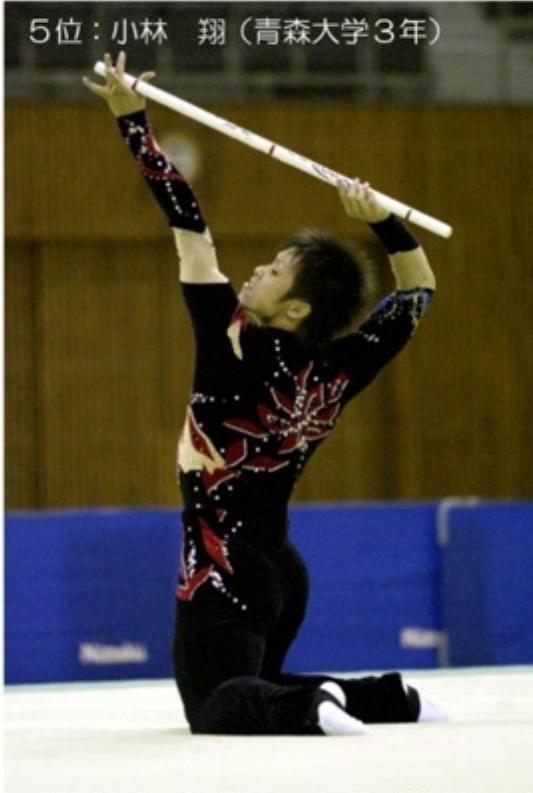
と中田は続けた。

男子新体操のあいまいなルールは、いつもこのあたりで逡巡している。だから、選手も指導者も迷い、ときには理不尽に感じ

ることもある。ファンとして見ている側も同じだ。「この演技になぜこの点数しか出ないのか？」と納得できないこともある。しかし、今のところこのあいまいさは解消されそうもない。また、私には解消されることがよいのかどうかもわからない。ルールが明確であれば、誰もが「点数の出る演技」を目指すだろう。そうなれば、今の男子新体操の幅広さ、豊かさを失くしかねないと危惧するからだ。

中田吉光でさえ、主張を軌道修正するほど、男子新体操はまだまだ変化の途中にあるのだ。そんな中で、徒手のよさ、動きの質で勝負したのが小林翔（青森大学）だ。大学生になってから、なかなか万全のコンディションで試合に臨むことができない。いる彼だが、今大会は比較的良好な状態のように見受けられた。少なくとも演技には危なげがなかった。その分、かつてのダンサーのようなイメージからぐっとたくましくなり「アスリート」らしい動き、そして表情が見られた。中田も、五位の小林に関して「体を動かせる選手。動きの美しさ

5位：小林 翔（青森大学3年）



が最大の強み。手具操作では、劣る部分もあるかもしれないが、動きでは他の選手には真似できないものを持っている。」と評する。今大会は、ロープで九・四五〇という高い評価を得たが、種目別決勝ではそのロープで最後の着地に失敗。クラブは棄権するほどのダメージを受けた。ジャパンに向けての回復を祈りたい。

もつともサブライズだったのは、六位の

前田優樹（花園大学）だろう。まだ一年生である。しかし、今大会ミスらしいミスも

なく、持ち前の表現力も十分発揮

した素晴らしい演技を見せた。

中田も、

「一年生ながらよくやった。脚力があるのでタンプリングも強いし動きにスピードがある。演技の終末での印象づけが巧みだったと思う。」

と言う。

「構成はまだ高校生のころとたいして変わっていないが、これだけ

評価されるの

はたいしたもの。

の。これから大

学生の演技に

変わっていく

のが楽しみ。」

私も同じことを感じ

た。彼の演技は、高校

生のころとほとんど変

わっていないかった。そ

れでもこうも違ってみ

えるということに驚い

6位：前田優樹（花園大学1年）



ただ。つまり、それだけポテンシャルの高い選手だったということだろう。これからが末恐ろしくも楽しみである。

七位には、松田陽樹（青森大学）が入った。

東日本チャンピオンの松田にとって七位は

残念な順位かもしれないが、敗因はリングで

の落下。ただそれだけだ。初日一種目目のス

7位：松田陽樹（青森大学4年）



張った演技は見せられたと思う。」

八位の久納直也（花園大学）も四年生だ。彼はまさに「最後だという思いを力にすること」ができたと言えるだろう。昨年のインカレでは十八位でギリギリのジャパン通過だった選手が大躍進をとげたのだから。ステイックのような美しい演技が似合う選手だと思っ

いたが、今大会ではスピード感のあるロープでも非常によい動きを見せていた。そして、クラブでは『小さな木の実』の曲を使い、抒情的な演技を見せた。今年の作品は、四種目それぞれに味がありどれもまた見たいと思う演技だった。

「ミスなく通せれば、これだけ

8位：久納直也（花園大学4年）



やれる！ という感じだった。基本の体操は柔らかく、しっかりしているからミスがなければ、この点数は出るべくして出たという印象だった。」

と、中田も久納の健闘を称えた。

九位の廣庭捷平（福岡大学）に話が及ぶと、中田は、とても嬉しそうだった。

「彼は、とにかく動きの切り替えの鋭さがいい。彼にしかないものをたくさん持っている。個性的な選手で、すばらしいと思う。今回はリングでのミスが響いたが、ジャパンではガツンとやってくれるでしょう。楽し

ティックは、気迫と情熱に溢れ、それでいて冷静さも感じられる素晴らしい演技で九・四二五と優勝した昔よりも高い得点をマークしたのだから。

「四年のインカレはほんとに難しい。」と中田は言う。

「最後だから頑張りたいとはみんな思うのだから、その思いが力になることもあれば、変な緊張になってしまう場合もある。松田は、リングは惜しかったが、なんとか踏ん

9位：廣庭捷平（福岡大学4年）



みだね。」

そう。廣庭と松田。西と東のチャンピオンはどちらもリングで泣いた。廣庭はリングで落下大場外があり、八・七〇〇。これがなければこの位置にはいなかったはずだ。それでも、昨年のインカレでの残念すぎる演技、そしてジャパン落ちから一年。廣庭の演技を待ちに待っていた人達を失望させることのない演技を、彼は見せた。点数はもう一歩伸びなかったスティックでも情感たっぷりの演

技で会場の空気を変えたし、ロープでもすべ

ての「動き」から表現を感じさせた。そして、圧巻だったのは、種目別決勝でのクラブ。きつと思いとおりにはいかないインカレだったに違いないが、そのうつぶんを晴らすかのような弾けた演技に、観客はみんなスカッとした。廣庭も四年生だ。大学生としての最後のジャパンでは、また観客を惹き込み、そして爽快な気分にかけてくれるだろう。

十位の佐々木智生（国士館大学）に対しては、中田からいくつか注文があった。

「まず、もっと気持ちの切り替えを早くしたほうがいい。ミスをするとき引きずっているのが見てとれるほどわかってしまうのが、なんとも惜しい。そして、体の大きさを生かせる動きのしなやかさを研究して、つなぎの部分をもっと大事にすると強くなる。」

つまり、それだけ佐々木のポテンシャルを中田は評価しているのだ。だからこそ、「惜しい」という言葉が出てくる。

「そりゃあ、あれだけのスケールの選手はなかなかいないから、ミスしてくずれたりされるのもつたいない。体の大きさだけではなく、投げの大きさ、思い切りのよさ。あれは、国士館じゃないと育たない選手だ。だから、あのスケールを生かした演技を、これからももっと追究してほしい。」

たしかに、今大会での佐々木は、一種目目のリングは、すこしずつ危ない場面はありながらもノーミスでまとめたが、スティックでまさかの落下二回。一日目は、不本意なまま終わってしまった。結果的には、二日目の二種目をどちらもノーミスの九・三〇〇でまとめ、順位も十位まであげてきたが、そこまでの力がありながら、東インカレに続いて一日目がブレイキになってしまった。

東インカレ前には、かつてなく「勝たたい！」という欲をもってやってみたが、それがいい方向に作用しなかったという佐々木だが、今回は「無欲」を意識しすぎて、少し

10位：佐々木智生（国士舘大学3年）



緊張感が足らなかったと言っていた。中田も認めるだけのスケールの大きな選手でありながら、「勝ち」を意識することにまだ慣れない。そんな人のよさが彼の魅力ではあるが、もう大学三年だ。そろそろ、本気で「勝ち」を狙う戦い方を身につけて、ジャパンで、そ

して来年は大ブレイクしてもらいたい。十一位以下は、籠島遼（青森大学）、小椋恭平（同志社大学）、佐藤秀平（青森大学）、竹内佑真（花園大学）、水島勇貴（国士舘大学）と続き、十六〜十八位には、本田拓（中京大学）、畠山可夢（国士舘大学）、服部心（花園大学）と一年生が三人入った。

った。

ジャパン出場圏内の十八位までの内訳は、四年生が五人、三年生が六人、二年生が三人、一年生が四人。こちらもなかなかの下剋上を感じさせる。

今年の全日本選手権は、十一月十六〜十八日の三日間、代々木第一体育館で行われる。お楽しみは、まだまだこれからだ。

青森大学、

前人未到の十一連覇！

男子団体競技

団体に話が及ぶと、中田はやや歯切れが悪くなった。昨年まで自分が率いていた青森大学は、ついに十一連覇を成し遂げたというのに。

「優勝はしたんですが……」

どことなく冴えない表情で中田は言う。

「青大に関しては、練習での出来も知っているだけに、インカレ本番の演技は、出しきれないという感じがあって、喜べない。」
と言うのだ。

私を知る限り、会場の観客の中でも、今回の青大の演技に関しては、「さすが！」という声が多かった。私も、今回の勝ち、文句

なしだろうとじつは感じていたのだが、中田はそうではないと言う。

「個人の能力は、やはり花大が一番高かったし、熟練度も花大が上だったと思う。公式練習で見ている限り、花大は、インカレにむけて精度が上がってきていた。練習の成果が出ているな、と感じさせる内容だったと思う。花大の選手達もかなり大きなブレ



ツシャーがあったと思うが、それも感じさせないだけの強さを彼らには感じた。」
そうは言うが、その花大の強さは、想定内ではあったはずだ。青大は、その花大に負けないための策を練ってきたのではなかったか。

「たしかに、今のチーム力では、花大に勝つのは並大抵ではないと、それは去年の時点でわかっていたので、今年はとにかく六人同時性しかない」と、それはまだ自分が監督だった時期から考えていて、高岩が監督になっても変わらなかった。」

そう。そして、それが功を奏したから、今年の青大の演技に対しては、「とても揃っていた！」という評価が多かったのではないかと、ところが、多くの観客を感嘆させたあの演技でさえ、「まだダメ」だったのだ。青大が本当に見せたかった同時性はあんなものではない、と。つまり、上下肢運動やバランス、倒立、胸後反など、同時性のわかりやすい徒手が揃うのは大前提であり、青大が見せたかったのは、移動や変化での同時性。見ているほうが「こんなところでも？」と驚くような



同時性が見せたかったのだ。肝心なところだけが合えばよいのではなく、動き始めから終わりまで、すべてが揃う。そんな究極の同時性を見せることに彼らは挑んだ。そして、試合には勝ったがその挑戦には敗れたと中田は感じていたのだ。



インカレ終了後に、高岩監督に話を聞いたが、そのとき、高岩も同じことを言った。

「揃えきれなかった。体操のかかりのずれとか、気になりました。この演技では、やった！ という感じにはなれない。なんとかまとめたな、という通しでした。」

初采配の全日本インカレで十一連覇を決めた監督らしからぬ殊勝な面持ちで、彼もまた「やりきれなさを指摘した。」

本当は、もっともっと、どこからどこまでも揃った演技を見せたかったのだ、青森大学は。そして、その演技で十一連覇を堂々と成し遂げたかったのだ。しかし、そうはいかなかった。と少なくとも前監督の中田と、現在の監督の高岩薫は思っていた。今回もまた「苦い勝利」だったと、彼らは言うのだ。「連覇を守れたことでは、安心しました。だけど、課題がたくさん残った試合でした。練習ではできていたことが試合で出しきれなかったのは、練習のやり方や本番までのもっていき方など、どこかに課題があるんだと思います。中田先生だったらこういう試合はしなかったと思います。勉強にな

りました。ジャパンに向けては、また一からやり直します。」

と高岩は言った。謙虚なのは悪いことではないが、せつかくの十一連覇なのに、反省の言葉ばかりというのでは、今ひとつ盛り上がりには欠けるが、実際のところ、今回の青森大学の演技は、かなりよかったと私はそれでも思っている。それが、彼らの目指していた域には届いていなかったとしても、だ。

今回の目玉だったという「同時性」は、十分に感じられた。とくに、間に一つテンポをはさんでの3バック！ これは、東日本インカレでも見てはいたがやはり度肝を抜かれた。しかも、これが演技終盤に入っているという凄まじさ。体力を消耗しきっているはずの終盤で、六人そろってこれができるというだけでも、十分すごいし、それが、素人目には「完璧！」に見えるほどには揃っているのだ。それでいいじゃないか！

たしかに今回も花園大学は強かった。中田も認めているように、個々の能力をたし算すれば、やはり花大の優位は揺るがなかっただろう。そして、西日本インカレ前にはもう構



2位：花園大学

成はできていたという今回の演技は、完成度も高かった。優勝してもなんらおかしくはない演技を、花大もしていたと思う。ただ、本番ではやっぱりミスがあった。予選では、鹿倒立で二人動き、上下肢運動でも動いた。決

勝でもバランスが一人、鹿倒立が一人動いた。どれもわずかなミスだ。演技全体の印象を損なうものではなかったし、そのミスを差し引いても、花大の演技には会場の空気を動かすだけの力があった。ただ、今大会では青大も完成度の高い演技をしただけに、傍目にもわかるミスは痛かった。そして、青大が「同調性」で勝負にきただけに、花大独特のふわっとした動きや、微妙なラインのポーズなどが、青大に比べると「揃っていない」ように見えてしまったきらいはあった。それが、花大の個性であり、魅力ではあるのだが、こと、「揃っているか否か」だけを比べるならば、今回は青大のほうが「揃って見える演技」だった。それでも、十一連覇を成し遂げても、もう手を挙げては喜ばないくらいに、現在、王者・青大と挑戦者・花大の実力は拮抗しているのはたしかだ。このつばぜり合いは、これからも続くのだろう。そして、おそらく「勝ちたい気持ち」や「新体操に懸ける思い」の強いほうが勝つ、そんな勝負になっていくに違いない。

団体三位に入った福岡大学について、中



田は、

「あれはよかった！」

と言った。

「昔、国士館と福岡が優勝を競っていたころを思い出した。あのころの福大も線のきれいな演技をしていたから。」

と嬉しそうだった。今回の福岡大学の作品は、観客受けもとてもよかったが、中田の心もしつかりつかんだようだ。

「福岡大学では、去年の西日本インカレのときの作品（「ほたる来い」）を使った作品が、とても好きだが、今回はそれに匹敵す



3位：福岡大学

るすばらしい演技だったと思う。体の使い方、表情もとてもよく工夫されていて、表現の仕方、見せ方など研究してきたなあ、と感じた。」

たしかに今回の福岡大学の作品は、言ってみれば「勝敗度外視」のような路線ではあった。しかし、結果的にはそれがよかった。四チーム中三チームが、強さを前面に押し出した音楽と演技だっただけに、福岡大学が放ったまったく違った世界観がガツンと静かなインパクトを与えた、という感じだろうか。

こういうものが見られることがあるから、男子新体操の団体は面白い！ そう思わせる演技だった。

福岡大学の健闘の前に、四位に沈んだ国士館大学について、国士館OBでもある中田に、率直な意見を聞いてみた。

「今回は一年生が三人入った若いチームだったから、いろいろ難しかったんだろうとは思う。」

と、まずは苦しいチーム事情を察する発言をしつつも、中田はこう続けた。

「能力的には、今の国士館は決して見劣りはしていないと思う。それなのに結果に結びつかないのは、やはりまとまりに欠けるのかな、と思う。大会会場での練習を見ていると、みんなが周りで声をかけて、雰囲気盛り上げていて、いい感じに見えるが、本当のサポートはもつと見えないところでやることだから。フロアーで演技する六人だけでなく、補欠や個人の選手も含めて一枚岩になれるかどうか。これからの国士館の課題じゃないかと思う。青大の場合、もしもチームが負けることがあるとし



4位：国士館大学

たら、それは六人の負けではなく、サポートの人間の負けだと思っている。周りの人間が、どれだけフロアーにいる六人と同じ必死さをもっているかが勝負を分けるんだと、自分は思ってきたので。」

少し厳しい意見にも聞こえるが、やはりそこはOBとしての思いもあるのだと思う。こ

のまま終わるような国士館を、中田だって望んではいないのだ。今回の国士館の演技は、直前までの状況を思えば、本番は非常に踏ん張ったと言えると思っっている。ただ、他の三チームの出来がああレベルだと、勝つことは難しかったとも思う。まだ「勝つための準備」はできていなかった。心身ともに、だ。ここ数年、国士館の団体は苦境にあると言わざるをえない。しかし、こういう時期に味わった悔しさは、間違いなく彼らの「財産」だ。この財産を持ち腐れないために、何をすればいいのか。

ひとつはつきり言えるのは、団体だ、個人だの境なく、国士館大学は一丸となって立ち上がる時期に来ている、ということだ。

そして、じつは私は心配していない。今はまだ結果には結びついていないが、「国士館のために一丸となる」のは、じつは彼らのものとも得意なパターンだから。

いつかきつと。

多分遠くないうちに。

彼らの「国士館愛」が、今の苦しい流れを変える日が来る。



浅井美彩登（日本女子体育大学）、劇的逆転優勝！

1位：浅井美彩登（日本女子体育大学）



2日間の試合が終わってみたら、優勝していたのは浅井だった。いささか失礼な表現かもしれないが、そんな印象だった。今大会、たしかに浅井はここ数年でもっとも充実した演技を見せていた。大きくくずれることもなく、体も絞れていてとても美しかった。しかし、1日目のフープでは3位、ボールは6位と悪くはなかったものの、優勝をかつさらうというほどの勢いは感じられなかった。

4年生の浅井にとっては、最後のインカレだったが、だからと言って変な気負いは感じられなかった。結果的にはその冷静さの分、浅井に勝利が舞い込んだ。

勢いは三上真穂（東京女子体育大学）のほうにあった。最終種目のクラブでの気迫は圧巻だった。ただ、それだけに三上は、2日目のリボンで勢い余ってしまった。

浅井は、肝心なところでミスをすることが少ない選手だった。悔しい思いもたくさんしてきたと思う。だから、最後の最後に運も味方したようにも見えた。

2位：三上真穂（東京女子体育大学）



3位：穴久保璃子（流通経済大学）



穴久保は1種目目のフープでは落下があったが、次のボールではきっちり気持ちを切り替えて息をのむような美しい演技を見せた。昨今の穴久保には、こういういい意味での凶々しさが見えるようになり、強くなったと感じられる。中澤は、1日目のフープで2位、ボール1位とあわや優勝？ という活躍を見せた。2日目での失速は残念だったが、それでもその正確な実施と、曲表現のできる動きと表情の良さでここにきてぐっと存在感を増してきた。山口は、五輪前にはフェアリージャパン候補として合宿に参加、その間の個人選手としてのブランクやさまざまなストレスもあったと思われ、調子を落としていた。しかし、このまま終わる選手ではない。持ち前の負けん気でまた浮上してくることを期待したい。

4位：中澤 歩
（日本女子体育大学）



5位：山口留奈（流通経済大学）



4年生の浅井、穴久保、中津が揃って6位までに並んだのは、最後の年だけに嬉しかったが、1日目のボール、フープとミスが続いた中津には、悔しい大会だったかもしれない。しかし、仲間達の大応援に応える中津の笑顔は輝いていた。成績の面では泣いたこともあったかもしれないが、おそらく仲間には恵まれた4年間だったのではないかと思える笑顔だった。そして、今年の1年生は強い！2位の三上に続き、7位にも三沢が入った。



7位：三沢真希
(日本女子体育大学)

一時期に比べると、勢いという点ではやや磨りの見える小西だが、それでもある程度の点数を確保するだけの実施力はついてきている印象だ。今大会ではリボンだけが21点台と足を引っ張ってしまったがほかの3種目をまとめてこの順位をキープした。

6位：中津裕美 (東京女子体育大学)



三沢もどこかでミスする選手というイメージがあったが、今大会では貫禄すら感じさせる堂々の演技を見せた。もともと表現力はあるだけに大学というステージでますます開花しそうな選手だ。

8位：小西夏生 (流通経済大学)



9位:矢崎ほの香(日本女子体育大学)



9位にも1年生の矢崎が入った。矢崎もじつにいきいきと、それでいていねいな演技で、この位置につけた。とくにリボンでは種目別決勝にも残る健闘を見せた。高校生までは元気ではつらつとしたイメージだったが、大学生になってぐっと雰囲気は大人になった。これからは期待したい。

清水の10位は、本人も残念だろうが、今大会の清水はミスが多すぎた。1種目目のボールは、意地と気迫の感じられる演技だったが、フープのラストでは場外。2日目も立て直せなかった。しかし、演技構成の難易度、表現力では抜けたものをもつ選手なだけに、ジャパンでは、そして最終学年になる来年も力を発揮してくれるに違いない。

「女子の新体操は演技が忙しすぎてつまらない」と思うことも多い昨今だが、大学生の演技を見ていると、そうとも思えなくなってくる。難度や操作がつまっていることには変わらないが、熟練度が上がってくることに加え、大学まで新体操を続けている選手には「表現する喜び」を知っているタイプが多いこととも無縁ではないように思う。これをやれば何点プラス、という計算が透けて見えるような演技ではなく、1つ1つの動きや操作にも意味が感じられる演技であれば面白く、感動もできるのだ。インカレを見ていて、とくに女子は大学生に期待したいという思いがますます強くなった。頑張れ、大学生達！

10位:清水花菜(日本女子体育大学)



東京女子体育大学、団体63連覇達成!

1位：東京女子体育大学



東京女子大学のインカレでのこの強さはなんなんだろう？ ついに63連覇を成し遂げた。今年は無理かも？と言われながらも繋ぎ続ける連覇のたすきは、年々重くなっていくがその重みに負けないだけの強さを彼女達はもっている。



2位：武庫川女子大学



2位に入った武庫川女子は、挑戦者の演技だった。果敢に攻め続ける演技ゆえにリボン&フープではミスが出たが、ボールはすばらしい出来だった。結果、ボールでの貯金で嬉しい2位！ ジャパンにも期待したい。

3位：日本女子体育大学



リボン&フープでは東女を上回り、意地を見せた日本女子体育大学だが、ミスが出たボールでのピハインドが響いて悔しい3位に終わった。近年、インカレ以外の試合では東女を凌駕することもある日女だが、インカレではなぜか勝てないというジンクスは今年も生きていた。ジャパンでの巻き返しに期待したい。

このところ4位が定位置になりつつある国士館。数年前にはジャパンを逃したこともあったことを思えば、大躍進ではあるが、今の国士館ならもっと上にいってもおかしくない。ミスのない実施でさらなる高みを目指してほしいチームだ。

4位：国士館大学



5位：仙台大学

女子はインカレ6位までに、ジャパン出場権が与えられるが、上位争い以上に自熱しているのが、このジャパン争いだ。今年は仙台大、福岡大が入ったが、ここに花園大、中京大などがからみ毎年のように入れ替わっている。

仙台大は昨年、今年と連続出場するだけの地力をつけてきている。昨年はジャパンを逃した福岡大は、今年、コケティッシュな魅力あふれる演技をボールで見せ、ジャパン出場権を奪還。7位以下にも台風の目になりそうな日体大や流通経済大など力をつけてきている大学もあり、ますますこの競争は激化しそうだ。

6位：福岡大学





昨年の全日本選手権個人総合2位になった柴田翔平(当時青森大学)は、2012年9月15日、カナダへ旅立った。シルク・ドゥ・ソレイユの「MICHAEL JACKSON THE IMMORTAL WORLD TOUR」がラスベガスで常設公演を行うことになり、そのメンバーに選ばれたのだ。モントリオールでのトレーニング期間を経て、数か月後には、ラスベガスでの舞台に、柴田は立つことになる。

シルク・ドゥ・ソレイユの一員として舞台に立つ。

それはたしかにスゴイことだ。

しかし、「シルクの舞台に出るから」彼はスゴイわけではない。

私が男子新体操を熱心に見始めた二〇〇九年のジャパン。当時、彼は大学二年生だった。このときの彼の演技の凄まじいまでの勢いは、今でも私の記憶に残っている。

そのころ、私はまだ選手の顔と名前も一致していなかったが、ジャパンが終わるときには、「柴田翔平」の名前と演技は、しっかりと記憶に刻まれた。

そのくらい彼の演技は強烈な印象を残したのだ。

なにしろ、スピードが違っていた。

技術が凄い。

そして、止まらない。九十秒間、ほとんど止まって見えないところがないのだ、体も手具も。

また二〇〇九年のジャパンに関していえば、それほどの演技をしながら、彼はミスをし



2009 ALL JAPAN <撮影：榊原嘉徳>

しなかった。素人目にも彼の演技の難しさはわかった。絶対に、人一倍難しいことをしているのだが、まるでそれが「なんでもないこと」であるかのようにさらっとやっつけてのける選手。それが柴田であり、私はその「にくたらしいくらいの強さ」に惹かれた。

そして、惹かれながらも、彼の演技に「やけくそ」のような「悲しみ」を感じていた。一言で表現するなら「おれ、こういう演技しなくてもいいけど、なにか？」というような。

そんな開き直りのような感じを受けたのだ。二〇〇九年のジャパンで、柴田は個人総合三位。種目別ロープでは金メダルも獲得した。開き直って、なおも強い。そこに彼の「意地」を見た気がして、この選手のことを気になってたまらなくなった。

その後、二〇一〇年、二〇一一年と「柴田翔平」を見続けてきた。そして、その二年間、彼にはずい分、楽しませてもらった。ハラハラもさせてもらった。

その彼が、シルクに行ってしまうと知って、これはスゴイことなんだから、喜ばなければと思う反面、寂しさのほうが大きかった。

そして、だからこそ、今のうちに彼の話を聞いておきたいと思った。

●「柴田翔平、変身！」の軌跡

まず、聞いたかったのが、大学二年でジャパン三位になったあと、残り二年間の大学生としての競技生活をどうしたいと考えていたのか、ということだった。

「二〇〇九年のジャパンは、自分ではこれ以上ないという演技ができた大会でした。それで、三位になれてとてもうれしかったけど、一方で、このままではダメなんだな、と感じた大会でもありました。結局、勝つのは動きのきれいな人なんだ、と思い知ったというか。自分には、動きの美しさはないと思っていて、高校のころからそこは他の部分でカバーしようとする、技や手具操作しかない！と考えていました。自分にはそれしかない！と思っていたんです。それで突っ走ってきた結果が、二〇〇九年で当時の自分にとってはすごくいい演技ができたんですが、それでも三位だったんです。」

柴田は、わりあいよく構成や曲を変える選

手なのだが、大学二年生のときの作品は、たしかにどの種目もスピード感のある曲で、本当に止まるところのない演技だった。

ゆっくりした曲では、演技したことがなかったの？と聞いてみると、

「大学一年のインカレ、ジャパンのステイックはゆっくり目の曲でした。でも、それでは何か気持ちののらなくて。おまけにインカレの種目

別決勝では、病院行きになるくらいにの失敗もして。ほかの種目を棄権したんですよ。

それで大学二年のときの路線にしたら、はまったという感じでした。ただ、やはりそれほどばかりだと四種目とも同じように見えてしまい、評価もそれなりに抑えられてしまうと感じました。」

「はまった路線」での限界を二〇〇九年のジャパンで感じたという柴田は、二〇一〇年



2010 ALL JAPAN <撮影：小林隆子>

九五〇。総合順位が七位と前年を下回る要因となってしまった。

結果だけ見れば、二〇一〇年ジャパンでの彼の賭けは失敗だったとも言えるのだが、ジブリ映画「借りぐらしのアリエッティ」のテーマ曲を使ったこのクラブの演技が、柴田の転機になった。

「二〇一〇年のジャパンのあと、ミスはあったけど、クラブがよかったと言ってくれた人もけっこういて。少し自信がついたというのもありました。

また、それまでは九十秒間全力疾走するような演技ばかりしてきたけど、じつは力を使っているところがたくさんあるんだな、と気づくことができたのも、あの演技をやってからです。」

のジャパンでひとつの賭けに出る。クラブの曲を変え、それまでの柴田カラーとは一味違う作品にしてみたのだ。

「この演技にしたら、通しても疲れないんです。だから、最初のうちはノーミスが出てもすつきりしなかった。おまけに、今までと雰囲気が違うから、やり始めたころはなんか恥ずかしくて。」

しかも、ジャパンではこの作品で、彼にしては珍しく二回も落下を犯してしまい、八・

●「自分はどう変わるか？」に

挑戦し続けた最後の一年

大学生活最後の年になった二〇一一年。東日本インカレ前に青森大学を訪ね、柴田の演技を見たときに、私は驚いた。クラブは「アリエッティ」を継承し、ローブは二〇〇九年に種目別優勝したときの作品のままだったが、スティックとリングはかなり趣きの違う作品になっていたからだ。とくに柴田の巧みな手具操作の代名詞でもあったスティック



は、従来までの作品に比べたら、スティックの動きも体の動きも少ないように感じられた。「いつもの柴田翔平」を期待して見ていると、もしかしたら物足りないのではないかとも思える作品だったのだ。

ただ、一方で、彼の動きには大きな変化が見えた。それまではまるで「止まっているところを見せたくない」かのような選手が、しっかりと止まって、彼なりの美しいラインを見せる瞬間を作っていたのだ。

その変化は、私だけでなく多くの人を戸惑わせ、中には「これでは柴田の良さが生きない」と評する人もいたが、それでも彼は、大学最後の一年間、「変わることを選択し、そして貫いた。」

「大学三年までは、自分はポーズがさまにならないから、止まる瞬間は作らないほうがいいと思ってやってきました。だけど、四年になるとときに、最後なんだからやりたいことをやりたいという思いが強くなって。今まで自分が避けてきたことに挑戦してみたいと思ったんです。だから、最後の年は、パーレツ



スンなど体作りに対する真剣味も変わりました。そしてやっているうちに、だんだんそれまでの自分とは違う形が見えてくると、それが面白くて。四年のとき、初めて踊っていて楽しいと思うようになったんです。最後の一年間は、練習もすべてほんとに充実感、達成感があった。もちろん、思うようにいかないこともたくさんありましたが、それでも楽

しかったんです。」

そう柴田は言うが、大学最後の年だ。インカレやジャパンでの優勝の可能性も十分にあった選手が、「それまでの自分」とは違う面を見せることに挑戦するリスクは考えなかったのだろうか？



「青森大学に入ったからには、勝ちを意識しないわけにはいかないと思ってました。自分もずっと勝ちたいと思ってたし、四年のときももちろんそれは変わりませんでした。だけど、勝てるかどうかだけでなく、自分にはこういうこともできるのかな？ ということを試す楽しさに目覚めてしまった、という感じでしょうか。」

思えば、青大への入学を決めたのは、『自分の可能性を試したくないか？』という中田先生の言葉でしたから、最後の年に思い切り試してみました(笑)。うまくいかなかったも、そこで止まらず、いきづまったら違うことをやってみよう。そう考えて過ごした一年間は、本当に楽しかったです。」

二〇一一年のインカレで、柴田はステイツクでまさかの落下場外を犯し、総合順位七位に終わる。後半種目のロープ、クラブは素晴らしい演技だったが、本人としては「完璧！」と思ったクラブでも種目別優勝はできなかった。



「あのインカレのクラブは、体はきつかったですが、最後のポーズをとったとき、踊りきった満足感がありました。自分では勝てないとは思えない演技でした。だから、これで負けるんだったら、仕方がない。この演技のままでは勝てないってことだな、と思ってジャパンでは演技を変えることにしました。」



2011 ALL JAPAN <撮影：小林隆子>

そして、大学生活最後の試合となったジャパンでは、浜崎あゆみの「Ballad」を使った真正銘の「泣かせる演技」を見せる。二〇〇九年、どの種目も闘争心むきだしの「おりゃー！演技」（柴田自身の表現）だった彼とはまったくの別人がそこにはいた。

「あれは、自分の人生で初めてせつない感じの演技を目指して考えた作品です。ただ、練習しているうちにだんだん闘争心が出てきてしまつて。せつない曲なのに、どうもおりゃー！という感じにはなつてしまいました

が（笑）。」

柴田本人はそう言うのが、そんなことはない。あれは、十分、「せつない情感」が伝わってくる演技だった。

●勝敗以上の達成感を得られた

二〇一一年ジャパン

「自分は、試合での敵は審判だと思つてました。審判をどう納得させるか、評価させるかの勝負だと。勝つことだけが大事なわけではないですが、審判の目を意識しない自己満足の演技ではもつたいたいと思つていました。

だから、三年までは自分が勝負するのは難度や手具操作だと考えていたし、それなりに評価してもらっていたと思いましたが、やっぱりそれだけでなく、自分の演技を絶対に認めないという審判も



いる。美しくないじゃないか、と言われてしまふ。しかも、二〇一〇年に大舌燕平さん（当時青森大学）がインカレでも優勝して、美しさや流れが重視される傾向になつてきているのを感じていたので、二〇一一年は、審判に新しい自分を見せたいという意識はありました。こんな風にもできるんだ、というところを見せて、審判にまいったと言わせる演技がしたかったんです。」

結果として、変身した柴田は、審判を十分納得させた。だからこそ、ジャパンで個人総合二位という結果を手にすることができた。優勝には届かなかったが、「自分の持ち味」で押しまくって獲った二〇〇九年の銅メダルとはまったく重みの違う銀メダルを彼は手にしたのだ。



もちろん、優勝も目指していたはずだ。そういう意味では、悔しい二位でもあっただろう。しかし、ジャパン後の記者会見でも、今回のインタビュでも柴田の表情はじつに清々しかった。「優勝できなかった」という悔いはほとんど見られなかった。

それはおそらく、四年のときの彼が、優勝以上に、「自分がどう変わるか」に懸けていたからなのだ、と感じた。その点で、彼は十分な達成感を得ていたから、こんなにも明るく、二〇一一年を振り返ることができただと思った。

「自分の上の代にはすごい選手がたくさんいましたから。大舌さんや北村将嗣さん、谷本竜也さん。彼らと自分だったら、絶対にこちらがスターでしょ、と思ってました。だから、同じ土俵で勝負してもな、という気持ちもあつたように思います。だけど、そういう思い込みを捨てて、変わること挑戦してみたら、自分、やればできるじゃん！と思うことも多くて、もっと早くからやれてたらよかったな、と思ったりもしました。」



自分はお酒が好きなので、夜はよく飲んで、昔の選手たちの演技のビデオを見ては、いろいろ考えて、自分のスタイルを考え抜いて……。そういう試行錯誤が本当に楽しかったですね。昔の選手違ってすごいから。リングやクラブは昔の演技のほうが確実に面白いものが多いですし、現役時代の荒川栄先生とかほんとにリスペクトしています。」

● マイナスからのスタート。
挫折経験を経て、
新体操に本気になった。

昔の選手や演技のことを話すとき、柴田はじつにいきいきとする。そして、本当に新体操が好きなんだな、と感ぜられる笑顔を見せる。



そんな彼はいつ、どうして新体操という世界に入ってきたのだろうか。

「自分は、幼稚園から小学校低学年までかなり太っていて、運動も苦手。かけっこはいつもクラスでビリでした。それが、小学校二年生のときに、妹がやっていた新体操のお迎えについて行ったら、そこで男子も練習しているのを見て、やってみるかということになったんです。少しでもやせればと思って、多分、親がやらせたかったんじゃないですか。はじめは週一回のならないことという感じでしたが、三年生のとき、小さな大会に出て金メダルをもらったんです。それまで運動でメダルなんてもらったことなかったから、それはもう嬉しくて、だんだん新体操にはまっていきました。

五年生のときに、全日本ジュニアに初めて出たんですが、もう練習からまわりの雰囲気にもまれてしまって、リングでは場外するわ、ミス続きで、六・〇〇〇という得点をたたき出してしまい、ほんとに恥ずかしかったです。当時から同じ東北に福士祐介（青森大学で



は同級生。二〇一一年全日本選手権個人総合三位）がいて、福士くんはこのころすでにすごかったんで、なんとか福士くんにも少しも近づきたいと思いました。そして、全日本ジュニアには絶対来年も出たい！ という思いが強くなったんです。

それからは、一気に練習量も増えて、毎日のように練習しました。自分が所属していた



福島新体操クラブは、女子メインのクラブだったのですが、自分は一人で練習することが多かったんです。もちろん、タンプリング用のマットはめったに使えません。だから、とにかく遊び感覚でいつも手具を練習していました。それで新しいことができると、周りがほめてくれるんですよ。すごい、すごい！とおだてられてまた頑張る！ その繰り返し

でした。

福島新体操クラブでは、はじめからスティックを使わないで、最初は新聞紙をまるめてスティック代わりにして操作の基本練習をするんです。これだと失敗して当たっても痛くないので、思い切りやれるし、いろんなことに挑戦できる。自分の強みである手具操作の基本に関しては、このジュニアクラブで学ばせてもらったと思っています。」

もとは運動も苦手なぼつちやりした子どもだったという柴田が、世界に名だたるシルク・ドゥ・ソレイユに入るといふのだから、子どもの将来は本当にわからないものだ。

ロンドン五輪で金メダルと獲得した体操の内村航平もデビュー戦は最下位だったという。柴田にとっても、恥ずかしい思いをしたという初めての全日本ジュニアが、その後の彼の出发点になったと言えるのかもしれない。そう。人は周囲から言われて動くうちは本気ではないのだ。

小学五年生だった柴田は、おそらくそれまではなんとなく新体操をやっていたのだろ



う。ところが全日本ジュニアで広い世界を知ったことで、自分の中に「もっとうまくなりたい！」という本物の思いが芽生えたのではないか。

大学四年のときに、どこまでも自分を変えらることを追究した柴田も、きつと同じだ。誰かから「もっと動きを重視したら」「美しい演技もできるようにならないと勝てないよ」

と言われたから、ではなく、自分がそうしてみたいと思ったから、彼は本気になったのだ。

●シルク・ドウ・ソレイユへ。

そして、その先のこと。

青森大学在学中にも、「BLUE TOKYO」のメンバーとして華やかなステージも経験している柴田だが、四年の春に進路について



聞いたときには、「堅実な道を進みたい」と言っていた。「BLUE TOKYO」もシルクもその時点では考えていない様子だった。その彼が、シルクに入るというのも、おそらくまた人から言われたのではなく、自分の本気スイッチが入った結果なのだろう。

「シルクに関しては、今までやってきたことを生かせるステージとしては最大のもので、やってみたいという気持ちが出てきて、挑戦することになりました。」

でも、じつはパフォーマーとしての活動以上に、シルク・ドウ・ソレイユという組織がどう成り立っていて、どう活動しているのかということに興味があるんです。それを肌で感じて来れば、帰国した後で、日本の男子新体操に役立てることができんじゃないかと思うので。

シルクでの二年間が終わったあとどうするか、決めてはいませんが、考えてはいます。新体操じゃない別のことをするのは、もったいないとは思っているので、おそらくなんらかの形で新体操には関わることになると



います。シルクでの経験もそこで生かせたらいいと思っています。」

いつかはまた戻ってくるであろう男子新体操のこれからについて、何か思うことは？と聞いてみると、

「大学卒業後は、ときどき指導もしていますが、教えていて思うのは、新体操という競

技はやりたいことをやっているだけで勝てる競技ではないということです。とくに個人競技をやっている子達は、自分のやりたいことがはっきりしている場合が多くて、それはいいことだと思ふ反面、それだけだと勝てないんだよ、と。それが今の自分にはわかるので、まだ現役の選手たちには早く気づいてほしいな、と思います。

また、今の男子新体操のルールは、できる人を助けないので、理不尽に感じることもありますが、そこをうまく利用すれば、とびぬけた能力がなくても点数をとることはできると思ふんです。その工夫や努力を怠って、自己満足でやるのはもったいないと思ひます。

いつか指導者になることがあったら、そういうことも踏まえつつ、やはり基礎がしっかりした選手を育てたいと思ひます。基礎を疎かにしてドヤ顔で見せるような演技は、自分にはさせたくないです。」

どこまでも明るく、アグレッシブに自分のこと、新体操のことを語ってくれた柴田の表

情には、「ひとつのことをやりきった満足感」があふれていた。優勝はできなかったという矜りはみじんもなかった。貫きたいものを貫けたとき、人はきつとこんな顔になるのだ。あまりにも清々しい表情をしている彼に、「新体操人生に悔いはなさそうだね」と言うてみた。

「大学時代は、いつか中田先生を演技で泣かせてやる！」と思っていました。でも、無理かな、と思っていたんですが、四年のインカレのロープが終わったときに、先生が泣いてて（笑）。びっくりしましたけど、やったー！と。あれは、自分はこのために新体操を続けてきたんだな、と思えた最高の瞬間でした。」

新体操で得られ

た達成感を胸に、柴田翔平は旅立った。これからも、「自分はどこまでできるのかな？」とわくわくしながら、新しい世界で挑戦し続けるに違いない。

（取材・文…椎名桂子）

※二〇二二年六月四日インタビュー



鹿児島実業 2012 徹底研究

～前代未聞の監督コラボ「一休さん」を大検証！～

＜撮影：小林隆子/文：椎名桂子＞

さあ、今年もインターハイに彼らがやってきました！ そうです。鹿児島実業です。九州大会では 17 点台をマークして波にのる彼らの今年の目標は、「面白くて強いカジツ」！ この福井サンドームに、いよいよ、鹿児島実業が入場してきます！



このヘアスタイルはなんでしょうね？ なにか反省しているんでしょうか？ おや、監督のいでたちもちょっと異彩を放ってますが…。



スタートはこのポーズですか。曲は「ドラゴンボール」ですね。さあ、始まります。



ドミノ倒してつかみはOK！ そして、ドラゴンボールの曲に合わせてのしゃきしゃき行進。と思いきやフロア後方から前に出てくるところでは、上半身や腕も使った派手な振りもあり、レビューのように盛り上がります。どこまでも音に合った動きが見事です。



曲が「一休さん」に変わり、1年生のエース・福永くんが順番に頭をはたいていきます。加点はありませんが、福永くんは真剣そのものです。



6人がつながってがに股ステップでの移動です。こどもとくに加点はないと思われませんが、足の高さ、角度、ひじの曲げ方にまでこだわり、揃えてきました。得点を考えれば、まさにムダな頑張り！これがカジツです。真剣にふざけています。



基礎能力の差が出る「小さい跳躍」も今年はたくさん入れてきました。かなりレベルアップしてきた自信の表れでしょうか。



「一休さん」からの曲の変わり目で上下肢運動。側学もかなりきれいになりました。そして、揃ってきました。



これは…2700の「右ひじ左ひじ交互に見て」だあ！さすがに動きのキレがいいねえ！



おおー！去年のなんちゃって鹿倒立とは別モノ〜！よくやった！頑張った！



緊張する鹿倒立のあとは、「プリキュア」の曲にのって踊りまくり！笑いを誘う動きながらも、指先、つま先、足を上げる角度など、かなりこだわってます！



キャプテンの矢野くんが、飛びます、飛びます！



上挙、きれいやないかいっ！ 泣かせるぜ。



おなじみの「びよこびよこ走り」で彼らが向かう先には…先には…。樋口監督の姿が見えますが、まさか？ まさかあ〜？ 一体なにが起こるんだあ？



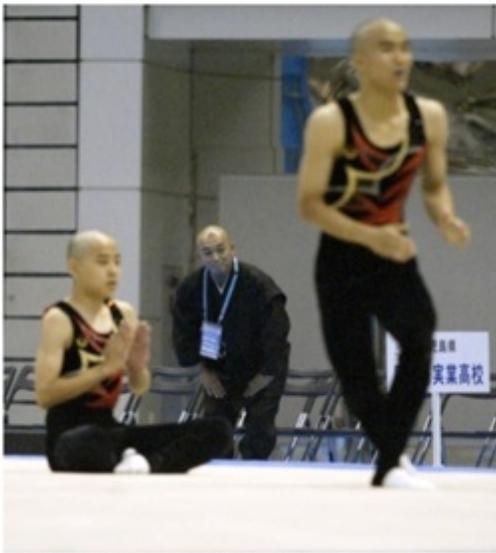
6人が3組に分かれて、正面からくるりと自分の左側を指さすようにカノンで向きを変えると、そこにはいつの間にか起立して手を合わせている樋口監督が！ そう、彼はこの瞬間を満を持して待っていたのだ！ おそらく史上初の監督参加作品がここに完成、しちゃうのか？



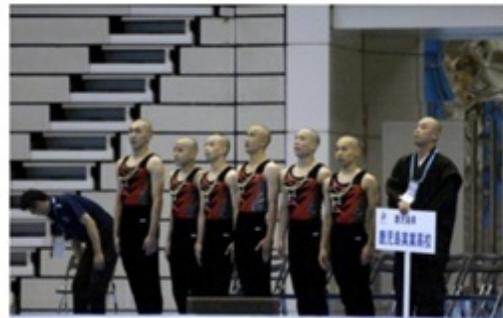
6人が揃って指さすと、樋口監督は静かに合掌。
ここに監督コラボ作品が完成だあっ！



フロアーから戻ってくる選手達を握手でねぎら
う和尚、じゃなくて樋口監督。



「してやったり」の笑顔浮かべつつ、肅々と
番席する樋口監督。あんた、スゴイよ！



並んで会場に挨拶をする選手達と和尚、じゃな
くて樋口監督。
ヘアスタイルから衣装まで、どこまでも「笑い」
のためにこだわって、そしておそらく自分達が
いちばん楽しんで演技した鹿児島実業の 2012
年夏は終わりを告げました。

会場の思いはただひとつ。

来年もまた
インターハイに来てくれ！



かわいらしい一休さんポーズで演技終了！ 今
年もカジツは笑わせてくれました。そして、段
違いにうまくなった彼らは、笑いだけでなく会
場を沸かせました。あっぱれだぜ、カジツ！

地元のテレビ局が密着取材したテレビ番組を見
たら、樋口監督は、選手達を送り出す前に「7
人で伝説になろう」と声をかけていました。わ
ずか数秒の出番であり、フロアーに集中して見
ていた人（審判も）にはおそらく気づかれな
かったかもしれない樋口監督の演技でしたが、た
しかに彼らは7人で、この作品を演じきったの
です。

いくつかのミスもあり、得点や順位は目指した
ところには届きませんでした。樋口監督は、
「子ども達と一緒に残る思い出を作れてよかつ
た」と笑顔で語っていました。
鹿実の新しい部旗に書かれている文字は「笑門
来福」この文言にふさわしい演技を、これから
も追及してくれるに違いない。

Takako Kobayashi's Gallery



Last Stage

直前の怪我による、戦線離脱。最後のインカレで、こうして誰よりも大きな声を出すことしかできなかった選手がいる。

きっと過ぎてしまえば、「そんなこともあった」そう思えるのだ。

でも、そのときは、やはりつらい。

だからこそ、彼は大きな声で仲間を鼓舞し続けた。そうするしかなかった。

「最後のインカレ」が、こんな風に終わっていった選手もいる。

That's life ～これが人生 なのだ。

このコーナーでは、カメラマン・小林隆子氏撮影による貴重な写真を紹介します。

新体操魂 第2号

<http://p.booklog.jp/book/53774>

発行日 2012/9/20

編集&制作&取材&文／椎名桂子

撮影／小林隆子

表紙デザイン&題字／小島杏奈

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57169>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57169>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ